

INTERVIEW

子どもネットワーク記者 ユニセフスタッフにインタビュー



ユニセフで はたらくこと…!



今回、ユニセフ子どもネットワーク記者は、ユニセフに入って16年、ナミビアやモルディブ、バングラデシュなどの事務所を歴任し、現在はユニセフのニューヨーク本部で上席事業資金担当を務めるベテランスタッフの久木田 純さんにインタビューしました。この4月まで久木田さんが副代表をつとめていたバングラデシュ事務所でもユニセフに入って2年の市川奈緒美さんも飛び入り参加してくださいました。さて、おふたりからネットワーク記者はどんなことを聞いたのでしょうか？



自分の信じていることができるのは国連の職員

Q 上席事業資金担当とはどのような仕事ですか？

また、市川さんのお仕事は？

A: (久木田さん) 世界中で活動するユニセフの資金は3分の2がいろいろな国の政府から、3分の1が民間から提供されています。日本だと日本ユニセフ協会が集めているのが民間のみなさんからの募金です。ユニセフの資金は自由な拠出金です。各国がユニセフの仕事がいいと思えば出す。よくなければ出さないというものです。今、ユニセフ全体で1年間に10億米ドルくらい(日本円でおおよそ1200億くらい)の資金をいただいています。その中でわたしは政府からよせられる資金を担当しています。日本、韓国、オーストラリア、ニュージーランドの政府やアジア開発銀行、世界銀行などの国際金融機関からの資金を担当し、協力関係をもつ仕事をしています。

(市川さん) わたしはバングラデシュ事務所のプランニング・セクションという部で働いています。事務所全体の仕事を見つ、政府と相談しながら、子どもについてどのようなプロジェクトをすすめていったらいいかを決めたり、子どもや女性の状況について全国調査をしたりしています。それから、バングラデシュの「女性と子ども省」と協力し、子どもの権利が守られているかどうかを調べて、国連の「子どもの権利委員会」へレポートを送るという仕事もしています。

Q ユニセフで働こうと思ったきっかけは何ですか？

A: (久木田さん) 小さいころは理科少年だったのですが、高校生のときに、人間のこと、世界はなぜこんな状態なのかということをもっと知りたいと考えるようになりました。それから海外で仕事をしたいとも考えるようになったので、英語を勉強しはじめました。高校生くらいだとちょうど「自分とは何か」なんてことを考えるようになる時期ですね。わたしは、自分自身の力がついていくことと人類の平和や発展、どちらもかなう生き方をしたいと思いました。海外に出て仕事をするには、特派員になったり、商社マンになったり、外交官になったり、いろいろな方法があります。でも、商社で働いたらその会社のため、外交官なら国益を考えなければならない。特派員なら自分は手を出さずにありのままを報道するという役割があります。そう考えると、自分の信じていることをそのままやる、そしてその仕事で人類全体の幸福につながる仕事は国連職員だと思い、大学2年のころから国連職員をめざしました。

(市川さん) 小学校のころに「コンボギの日記」という昔の韓国のストリートチルドレンのことを書いた本を読みました。そのとき、「世界にはこんなに困っている人がいる。わたしには何ができるのか」と考えました。それで、人を助けられるような仕事や、世界が平和になるような仕事につきたいと思うようになりました。今は、外務省がおこなっているジュニア・プロフェSSIONナル・オフィサー(JPO)という国連に日本人の職員を派遣する制度で、ユニセフで働いています。

Q ユニセフ職員のご家族はどのように生活しているのですか？

A: (市川さん) わたしは独身ですが、国連で働きつづけたという独身女性にとって、家族を持つことは大きな問題です。2、3年ごとに国から国へ移動

する生活では結婚はむずかしいのです。将来わたしの両親が年をとったときにどうするかなど、日本に残している家族の問題もありますね。わたしの母はわたしを手伝うために一年間バングラデシュで一緒に生活してくれました。現地のボランティアに参加したりして、バングラデシュでの生活を元気に楽しんでいましたけれどね。

(久木田さん) わたしには妻と高校生の息子、小学生の娘がいます。国連職員の家族は本当に大変です。何年ごとに生活や言葉がまるっきり変わりますし、わたしが出張している間は、自分たちだけで生活しなくてはなりません。

でも、日本では経験できないこともたくさんあります。インターナショナルスクールに通う娘は英語も日本語もじょうずです。ストリートチルドレンなどにあって、そのくらしをよく知っているのも、むだ使いをしたりわがママを言ったりは少ないと思います。息子はもう4カ国で生活しています。中学の卒業論文でストリートチルドレンについて発表しましたが、よくできていました。妻はバングラデシュで日本人のボランティア会を立ち上げたり、NGO(民間の活動団体)についての本を何冊か翻訳しています。現地のNGOについてはわたしよりもくわしいですね。

Q もし、危険度の高い地域への派遣が決まった場合はどうするのですか？

A: (久木田さん) ユニセフは、子どものためなら何でもやる機関です。また、もっとも現場に近い国連機関といわれています。世界の子どものことを知ってほしい、子どもたちのために何か手伝いたい、そのためなら命をかけてもいい、というのが国連職員だと思います。大切なのは、そういった使命感や信念です。わたしはどこへでも行って働きたいと思っています。



開発途上国の問題って？

Q バングラデシュでは子どもたちはどんなようすですか？

A: (市川さん) バングラデシュは、北海道の2倍ほどの大きさのところに、日本より多くの人びとがくらしています。(データブックを取り出して)では、分頁ごとに説明しましょう。

健康について

バングラデシュでは、1000人生まれのうち54人は1歳になる前に命を失っています(2000年)。5歳まで生きられる割合はもっと低くて、1000人のうち82人は亡くなっています。この割合、日本だと4人くらいですね。

命を失う原因はたとえばげりです。脱水症状をおこして亡くなります。手当が遅れるととてもあぶないのです。また、かぜから肺炎になったり、最近では最近減っていますがはしかなど予防接種で防げる病気が原因のこともあります。



子どもたちが楽しく学べる学校づくりなどのプロジェクトもすすんでいます。©UNICEF/HQ96-0713/Noorani

教育について

小学校の就学率は男女とも約80%くらいです。そのうちの70%くらいが5年生まで進級しています。だから5年生

になっているのは全体の約半分ですね。ただ、1クラスに90人も子どもがいるような状況で、あまり質のいい教育をしているとはいえません。小学校を出てもその半分くらいしか十分な能力を身につけられていない、と考えられています。

中学校に進むのはさらに一部です。特に女の子は、それくらいの年齢になると結婚しなさいといわれて学校をやめてしまいます。男の子もお金がないから学校をやめて家のために働くことが多く、高校まで進む子どもは全体の20%くらいではないでしょうか。

水と衛生について

バングラデシュにはダッカやそのほかの都市をのぞいて水道がないので、ほとんどの人は井戸に頼っています。最近わかったことなのですが、その井戸の水が「ヒ素」という毒におかされていて、多くの人がヒ素中毒になっ



バングラデシュの農村やスラムでは水やトイレの問題をかかえています。©UNICEF/Water&SanitationInBangladesh-02

ています。ユニセフはヒ素が出ないところまで掘った深井戸をつくったり、雨水を使うようにすすめていたりしていますが、毎日使う水の問題なので、そう簡単にもいきません。

それから...、トイレはきたないです。たれ流しの状態だからきたないんだと思うんですね。農村では、ちょっと困ったボックスみたいなものを建てて、その中がトイレになっています。トイレの下は池や田んぼです。その池では洗濯をしているし、子どもも泳いでいます。いけない、と思いますが、ほかにトイレはありません。農村やスラム地域ではなんと82%がこうした「いけない」トイレです。

働く子どもたち

バングラデシュでは、10人に2人くらいの子どものフルタイムで働いていると考えられています。農村で農業を手伝う子どもが多くて、農村に住んでいる男の子が学校をやめる一番大きな理由になっています。仕事の内容では、都市部の子どもの方が危険な仕事についています。ユニセフは、子どもたちをなるべく危険な仕事から離し、教育を受けられるようにするための活動をしています。

(久木田さん) 開発途上国の問題の多くは共通しています。まずは生きる、教育を受ける、そして社会に参加する、こうし

Profile



久木田 純さん

現在、ユニセフ本部上席事業資金担当。ユニセフ・モルディブ事務所、ナミビア事務所、駐日事務所でも仕事をし、バングラデシュ事務所次長に。全事業の統括、政府やNGO、開発協力機関との渉外や資金調達を担当する。2002年4月より現職。



市川 奈緒美さん

現在、ユニセフ・バングラデシュ事務所プランニング・セクションのアシスタント・プログラム・オフィサー。国内外の一般企業勤務、NY国連本部にある平和維持活動(PKO)局でインターン、アジア開発銀行研究所などを経て、2000年からユニセフ勤務。

た子どもの権利を守ることがむずかしいのです。

今の世界は、日本や欧米など全体の20%ほどの豊かな国が、世界全体の富の85%を持っているという状況です。一番貧しい世界の20%の人びとは、1日に1米ドル(約120円)ほどの収入しかない中で暮らしています。日本の人びとはその1万倍くらいの収入があります。大きな格差がありゆがんでいます。これを変えるのがわたしたちの仕事で、一番必要なことは貧しい人びとのエンパワメント(力をつけること)です。何より子どもを力づけることが大切です。そして豊かな人びとの暮らしを変え、協力すること、それができれば、世界はよくなっていくと思います。



…▶ 援助ってしてあげるもの?

Q 援助される側としてバングラデシュの子どもは先進工業国をどう思っていますか?

A: (久木田さん) 多分、援助されるというふうには思っていないと思います。援助する、してあげるという関係はユニセフは持ちません。子どもたちが予防接種に行くとき「痛くてやだな」とは思っても、それが援助されているとは思わないでしょう。ただ、大きくなったときに、あの子の学校や予防接種にはユニセフの支援があったんだな、ということに気づくことはあるでしょう。

豊かな国が貧しい国を支援するというのは、国際社会の一員としての責任です。ユニセフは、現地の人びととお互いに協力関係にあり、「子どものためになることを一緒にやりましょう」という姿勢で仕事をしています。おそらく、そのためにユニセフは現地で一番感謝されている国連機関ですよ。みなさんだって、ああしろこうしろと命令する先生より、あなたがたの意見を聞いて、こうしたら? ああしたら? と提案してくれる先生の方がいいと思うでしょう。同じことです。

(市川さん) わたしも援助をしてあげているとは思いません。みんなが健康で平和な生活をしてほしい、わたしと同じように人生にいろいろな選択肢がある生き方ができるようになってほしいと思うからするんですね。



…▶ 子どもたちの笑顔があるから働ける

Q 日本より貧しい国に何が持っているよさとは何ですか?

インタビューを終えて...

ネットワーク記者の感想



今回参加してくれたネットワーク記者と市川さん。左から、大矢くん、市川奈緒美さん、市川なな緒さん、櫻井くん、植田くん

なかなか時間のとれない久木田さんや市川さんから直にお話を聞いたのはとてもよい経験になりました。久木田さんや市川さんが北と南の格差をなくそうと一生懸命に仕事をしていることが実感できました。こうして今も仕事をしていられるのは「子どもたちの笑顔」があるからだ、ということも分かりました。話を聞いていると、自分も早くこうした仕事につきたいと改めて考えてしまいます。開発途上国は今もがんばって、格差を縮めようと努力していて、先進国が生活を変えていかなければならないのに、我々は便利を求めているだけなのです。こういう便利さの追求はもうやめていかなければいけない、今我々は開発途上国にあるような人と人との関わり、元気のよさを取りもどさなければならぬと考えてしまいました。一刻も早く格差がなくなり、久木田さんのおっしゃった、世界平和と自分自身の平和をかなえられるといいなあと思います。そして、世界の明るい未来を改めて願いたいと思います。(櫻井 祐一 17歳)

久木田さん、市川さんとお会いして、何と元気な方たちだろうというのが第一印象でした。また、ユニセフ(国連児童基金)の名の通り心から子どもたちのことを考えていらっしゃることに感動しました。ユニセフの一員として働かれるときも、援助してあげるといってではなく、一緒に子どもたちのために行動しましょうという考えに、国際協力の原点を見たような気がしました。国際協力には、さまざまな形の協力があることはわかってはいたつもりですが、その根底にある精神的なものについて、いろいろなヒントをもとに、今自分が何をすべきかをしっかり考えて、将来、今回の企画が無駄にならないような活動をしたと強く思いました。子どもの笑顔や元気がうれしとおっしゃっていましたが、1日も早く世界中の子どもたちの笑顔が輝く日がくるといいなあと思います。そのため、ユニセフ子どもネットの一員として精進していきたいです。(大矢 哲 16歳)

「国連の職員」は、わたしにとって本当にあがれの職業なので、今回、久木田さんと市川さんから「ナマの声」をきくことができ本当にうれしいです。ユニセフは、豊かな国で生きる人たちと、貧しい国で生きる人たちとを結ぶ大切な橋だと思いました。わたしたちの生活と開発途上の国々との生活は、ものすごく離れていますが、「世界の人びとがみんな幸せになってほしい」と思う人は多いと思います。そういう人の願いを行動に変え、結果を出していく。お話を聞いていて、お二人の信念が伝わってきました。わたしはインタビューが終わってから、試しに久木田さんの言っていた人生計画表を書いてみました。百歳まで生きられるかは別として、16歳の現在地から終点までに、やりたいことがたくさんできました。お二人にお会いして、夢を見るだけではだめで、見直しをもって行動していくことの必要性を感じたので、わたしの計画表も、何度も見直ししながら、実現していきたいです。(市川 なな緒 16歳)



ぼくは今回の取材を通していろいろ学びました。まず、子どもたちの教育のことです。現地の子どもの学校に行きたくても行けないということをよくわくわく聞けてよかったです。特に女の子は小学校を卒業し中学に入る頃には結婚させられて中学に行けないという話には驚きました。また、井戸水にヒ素が入っているということはある本で読んだことあったけど、まさか皮膚病になったりして被害が出るほどひどいとは知りませんでした。また、ユニセフの資金は今まで政府が必ず出すものだと思っていました。しかしお話を聞いてユニセフの資金が自由拠出金だということも初めて知りました。ぼくは今回の取材で得たものを、これからの進路や学習に生かしていきたいです。(植田 浩光 16歳)

A: (久木田さん) わたしはバングラデシュの農村が好きです。田んぼがあって、緑があって、生き返った感じがします。また、人情が豊かで人と人との関わり合いがあります。お茶を飲みながら話すゆったりした時間があるというのもいいです。

日本だって温泉に行ったり、刺し身なんか食べたりすると、いいなあと思いますが、どの国に行ってもすばらしい風景があります。モルディブでは、夕日やかつお釣りの船、いるかがジャンプしている姿などを思い出します。ナミビアには砂漠の民がいて、髪を編んで、牛の脂や血を混ぜた赤いものをからだにぬっています。彼らが岩の上で夕方休んでいるシルエットなんて、本当に美しい。わたしたちにはないものがたくさんあります。

(市川さん) 何といっても子どもの笑顔ですね。子どもの笑顔があるからこそ、わたしたち職員は働いていきます。また、職場としての開発途上国は、チャレンジング、つまり挑戦しがいがあります。やったことの成果が見えやすい気がしますし、やったという実感もあります。それから、単純なことに喜びを覚えられようにもなりました。たとえば「水が出た」とか「電気がついた」なんてことに。(笑)



子どもたちの笑顔にはパワーがあります。©日本ユニセフ協会

Q 今までで一番印象に残ったこと、達成感を感じたことを教えてください。

A: (久木田さん) 開発途上国の子どもたちはみんないきいきとしています。それは多分、一生懸命生きていかなければならないからだと思います。学校に行けるなら、簡単なことでも一生懸命学ぼうとする、そんな元気があります。足りないことがあるから、補おうとする、それは人間の自然な力だと思えます。日本の子どもには、だんだんそういうところがなくなってきています。スラムでも子どもたちがワートと走り回っているのを見ると、その元気に圧倒されます。そんな子どもたちから、パワーをもらっている気がするのです。この仕事をやって

いてよかったなあと感じるときです。

(市川さん) バングラデシュの地方に行くと、村の人や女性、学校の先生などに、これからどのようなプロジェクトをしたらよいかと聞いたことがあります。本当に真剣にいろいろ話してくれました。バングラデシュのすべての人びとが、子どものことをよく考えていて、一緒に問題にとりくんでいこうとする姿勢がとても印象的でした。

首都ダッカの街を歩いていると、花売りの子どもや、路上で暮らす子どもをたくさん見かけ、自分の仕事に本当に役に立っているのだろうかと思ったりもします。でも、一生懸命話そうとしてくれたり、笑ってくれたりする子どもにであうと、やってきてよかったと思います。

…▶ 100歳までの人生計画表をつくろう!

Q 日本の子どもたちに一番言いたいことは何ですか?

A: (久木田さん) まずは世界の状況を知ってほしい。本やニュースなどを見て、貧しい国と豊かな国との格差の構造や原因を知ってもらいたいと思います。次に何をすべきかを考えて、それに基づいた勉強をしたり、仕事をしたりしてもらいたいですね。

実はわたしは「100歳までの人生の計画表」を書いていつも持ち歩いているのですが、ぜひみなさんにもやってほしいです。計画表の中に、「××歳までにこれをする、こうなる」ということと、そのためにやらなくてはならないことを書き込むんです。わたしは、何歳で国連職員になり、いつ結婚して(これはちょっと予定より早くなってしまいましたが) こういう仕事をして、定年後はこんなことをして、と全部書き込んでいます。そして、大切なのは書きかえることです。書いた通りにはいきませんからね。きっと役に立ちますよ。

あとは旅をしてください。できるだけ早いうちに開発途上国を訪ねたら、多くのことを学ぶことができるはず。自分で何かを変えたいと思う機会を持ってもらいたいと思います。

(市川さん) 日本で疑問に思うのは、マスコミの力が強く、流行に左右されやすいところ。流行に左右されない自分を持つてほしいと思います。自分は何がしたいのかをはっきりさせることができれば、自分の進む道に行けるのではないかと思います。また、ぜひ外国語を勉強してください。英語だけでなく、フランス語やスペイン語など。それから、専門分野をさらに向上させてほしいです。